

良質・良食味米安定生産・出荷のための栽培技術
—産米のタンパク質含有率低下、売れる米づくりを目指して—

Ⅱ

令和6年の水稲(もち米)の生育経過について

全道総括編

1 令和6年の気象経過と作柄状況

2 作柄の概況

3 令和6年産米の特徴

4 収量確保の要因

5 令和7年に向けて

執筆：北海道農政部生産振興局 技術普及課 上川農業試験場駐在
主任普及指導員 内 田 博 康（農業革新支援専門員）

II

令和6年の水稲(もち米)の生育経過について

全道総括編

1 令和6年の気象経過と作柄状況

(1) 農耕期間(4~10月)の気象経過(名寄市)

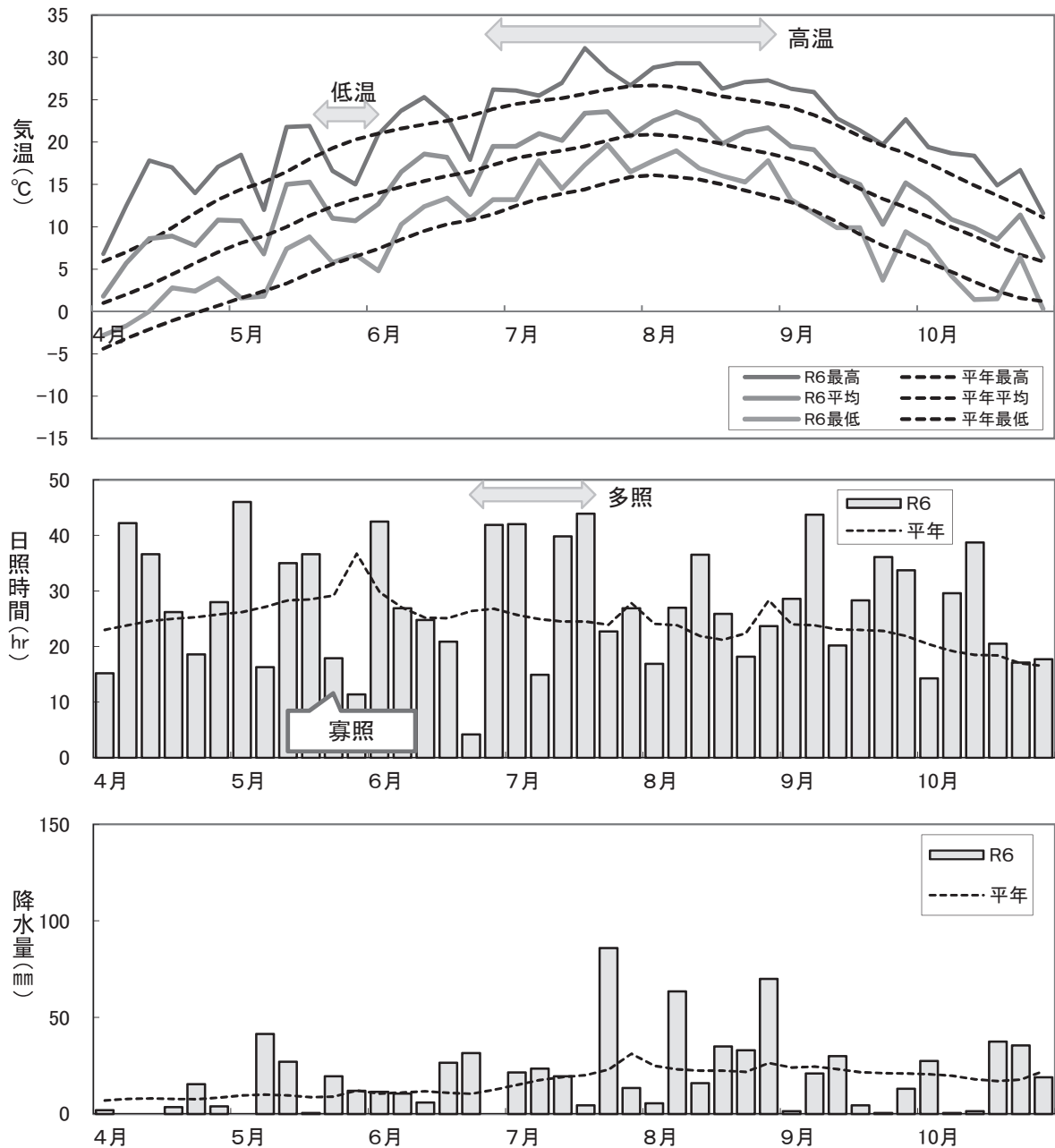


図1 令和6年気象図(名寄アメダス)

2 作柄の概況

令和6年産の北海道米の作柄は、北海道農政事務所公表（令和6年12月10日）による全道の10a当たり平均収量は562kg（ふるい目1.90mm）、作況指数103（やや良）となり、もち米団地のある地域は「良」、「やや良」となった（I 令和6年の水稲（うるち米）の生育経過2ページの図1）。

品質面では、農林水産省公表「米の農産物検査結果（令和6年11月30日現在）」による水稲もち玄米の一等米率は97.4%となった（図2）。また、ホクレン仕分け集荷による一等米出荷率は99.8%（令和6年12月13日現在）と高い値で推移している。

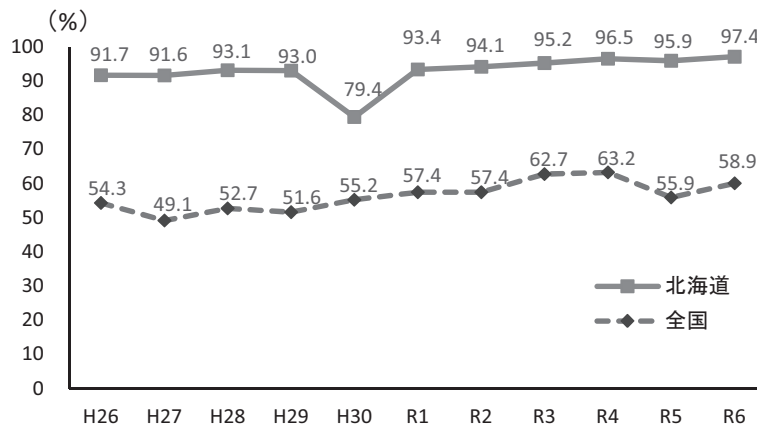


図2 水稲（もち米）の一等米率の推移（北海道と全国）

（農林水産省公表「米の農産物検査結果」の公表値より道技術普及課が作図）

（R6の数値は令和6年11月30日現在の公表値）

3 令和6年産米の特徴

(1) 融雪期から本田耕起

令和6年の根雪終日は上川（旭川）が4月6日（平年対比早1）、留萌4月8日（遅8）、オホーツク（網走）が3月14日（早18）と地域によりばらつきがあったが、融雪後は好天に恵まれ、ほ場の乾燥が進み、耕起作業は平年より早く行われた（表1）。

表1 令和6年水稲（もち米）生育期節・農作業期節（令和6年農政部農作物生育状況調査より）

振興局	作付面積 (ha)	作業期節				生育期節						
		は種期	耕起盛期	移植期	収穫期	出芽期	活着期	分けつ始	幼穂形成期	止葉期	出穂期	成熟期
上川(名寄)	3,140	±0	+6	+2	+6	+1	▲3	▲2	+2	+2	+2	+6
留萌	688	±0	+4	+2	+2	+1	±0	±0	+1	▲1	+2	+4
オホーツク	808	±0	+1	+1	+8	±0	±0	▲2	▲1	±0	+1	+4
平均		4/21	4/28	5/21	9/21	4/25	5/31	6/10	6/29	7/13	7/25	9/11
		±0	+5	+2	+6	+1	▲2	▲2	+1	+2	+1	+6

※平年に対する遅速、+は早い、▲は遅い

(2) 育苗期から移植期

は種期は4月21日（±0）と平年並で、出芽期は4月25日（早1）で平年並となった（表1）。5月4半旬までは概ね好天で推移し、移植時の苗質は平年並を確保した。

移植は平年並に始まり、移植期も5月21日（早2）と順調に行われた。

(3) 活着期から幼穂形成期

5月5半旬からの低温・寡照により、徒長した苗を移植したほ場や移植の遅れたほ場で植え傷みや退色が見られた。移植後の活着には日数を要し、活着期は5月31日（遅2）、分けつ始は6月10日（遅2）で推移した。6月に入り天候は回復したものの分けつの発生は緩慢となり、7月1日の㎡当たり茎数は、上川（名寄）で平年比76%、留萌は84%、オホーツクでは86%と少なくなった（図3）。6月5半旬以降は高温・多照となり急激に分けつの発生が見られ、7月15日に㎡当たり茎数が平年並まで回復した。

幼穂形成期は6月29日（早1）と平年並になった。

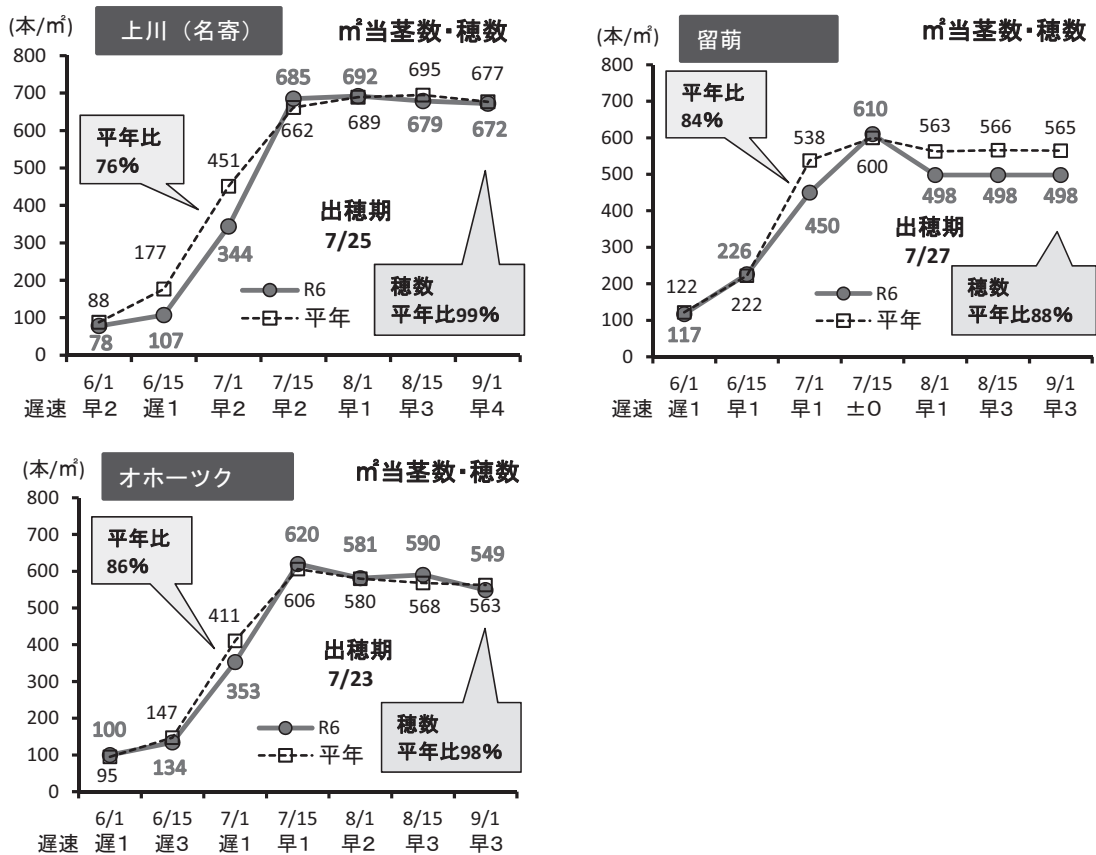


図3 水稻（もち米）の茎数・穂数推移

（左上：上川（名寄）、右上：留萌、左下：オホーツク）

※令和6年農政部農作物生育状況調査より

(4) 穂ばらみ期から出穂期

前歴期間の7月1半旬～7月2半旬から冷害危険期を終える7月4半旬まで高温で推移し、平均気温は平年以上を確保した(表2)。稔実歩合は平年並を確保した。

(5) 登熟期から成熟期まで

7月5半旬以降も気温は平年以上で推移し、出穂・開花、登熟は順調に進んだ。成熟期は9月11日(早6)となった(表1、3)。しかし、8月12日の台風の接近による降雨・強風により、倒伏が発生した。

登熟期間の積算温度、積算日照はともに確保することができた。

表2 前歴期間・冷害危険期の平均気温・積算日照時間

(令和6年と平年の対比)

	前歴期間		冷害危険期	
	平均気温(°C)	日照時間(hr)	平均気温(°C)	日照時間(hr)
上川(名寄)	20.5 112%	67.7 134%	20.4 107%	53.7 157%
留萌	19.3 109%	54.5 106%	19.5 105%	60.9 172%
オホーツク	21.8 123%	73.8 144%	20.6 112%	47.7 145%

※令和6年農政部農作物生育状況調査、気象データは上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出

表3 登熟期間の気温・日照時間の令和6年と平年の比較

		出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	登熟日数 (日)	登熟期間積算温度 (°C)	出穂後40日間積算 (°C)	登熟期間積算日照 (hr)	登熟期間一日当り日照時間 (hr)
上川(名寄)	R6	7/25	9/12	49	1,055	882	264	5.2
	平年	7/27	9/18	53	1,020	811	250	4.6
留萌	R6	7/27	9/16	51	1,080	870	339	6.5
	平年	7/29	9/20	53	1,027	812	295	4.9
オホーツク	R6	7/24	9/8	46	1,012	889	246	5.0
	平年	7/25	9/12	49	987	826	244	4.9

※生育期節・登熟日数：令和6年農政部農作物生育状況調査、気象データ：上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出

収量構成要素・決定要素を見ると、m²当たり穂数は上川(名寄)、オホーツクは平年並で留萌が少なく、一穂粒数は各地域で概ね平年並で、m²当たり稔実粒数は上川(名寄)、オホーツクは平年並で留萌が少なかった。しかし、千粒重は各地区とも平年並からやや重く、登熟歩合はオホーツクは平年並で上川(名寄)、留萌は高くなり、このことが収量確保につながった(図4)。

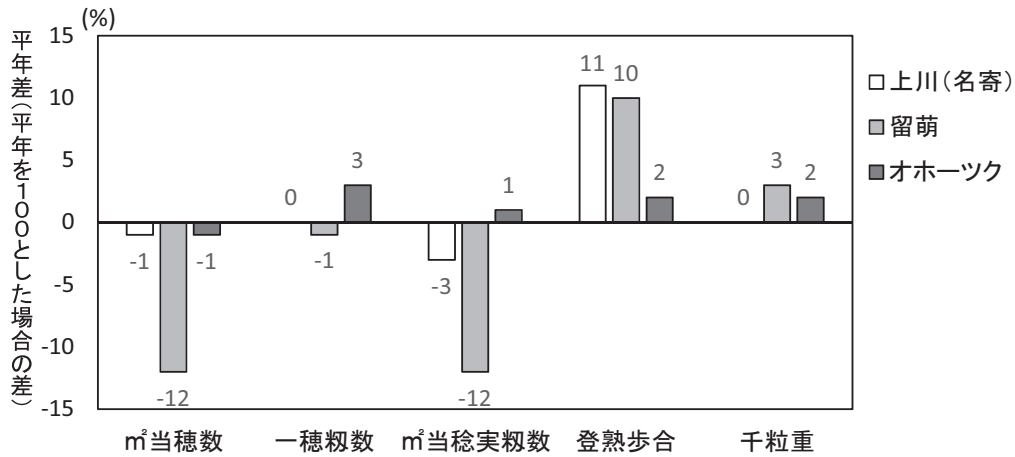


図4 水稲（もち米）の各構成要素の年平均比
(令和6年農政部農作物生育状況調査)

4 収量確保の要因

(1) 初期茎数は不足したが6月後半の天候回復により概ね穂数・総粒数を確保

初期生育が遅れ、茎数の確保が難しい年となったが、6月5半旬以降の高温・多照で平年並の茎数を確保できた。一部不足する地域もあったが、概ね穂数・稔実粒数を確保できた。

(2) 登熟温度、日照を確保

登熟期間は天候に恵まれ、収量の確保に結び付いた。出穂後40日の積算温度は、各地で850℃を超える高温登熟となり（図5）、1日当たりの日照時間も5時間以上を確保し、登熟が進んだ（図6）。登熟歩合が平年以上に高くなり、高収量につながった。

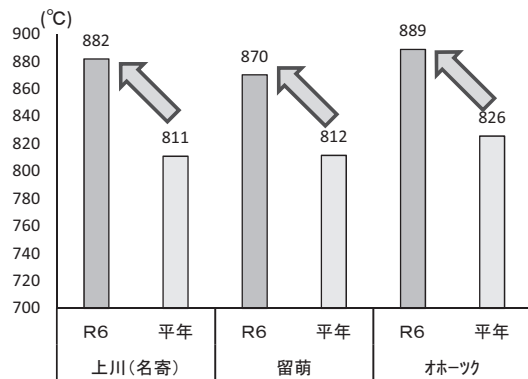


図5 出穂期後40日積算気温
(令和6年と平年の対比)

※令和6年農政部農作物生育状況調査、気象データは上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出

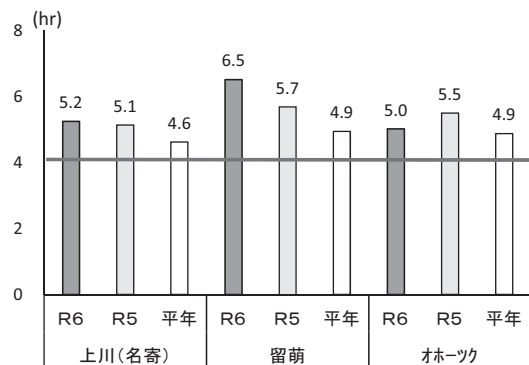


図6 登熟期間の1日当り日照時間
(令和6年、5年と平年の対比)

※令和6年農政部農作物生育状況調査、気象データは上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出

※登熟期間の日照時間が4時間/日以下になると登熟が不良となる(北海道の米づくり(2001年))

5 令和7年に向けて

令和6年は令和5年ほどではなかったものの、同様に高温傾向の年となった。懸念された高温の影響については、ほ場の水分保持をはじめとする適切な栽培管理が実施され、胴割粒の発生等は少なく品質を維持し、高収量を得る良好な結果に結び付いた。しかし、移植後の低温・寡照で初期生育の確保が難しく、高温で推移しなければ挽回できなかった恐れもある。これも令和5年と同様の傾向である。良好な登熟を得るためには、初期生育の確保が重要である。健苗育成と5月25日までの適期移植をあらためて心掛けていただきたい。

また、倒伏が散見された。土壌診断を行い、窒素肥沃度（可給態窒素量）、乾土効果の有無、有機物の施用に応じ適切な施肥量を決定していただきたい。資材の価格は依然として高騰している状況である。コスト削減に向けて施肥設計、作業計画に無理・無駄がないか、あらためて見直しが必要である。

また、高温に対する技術対策については、「水稻うるち米生育経過と本年の取組」の項も活用してほしい。できることから取り組み、令和7年産も良質なもち米生産に努めていただきたい。